佐伯史談会　山陰方面研修旅行

十月二十三日 ― 二十六日

神話と詩の山陰の旅

富沢　泰
（会員・蒲江町）

竜野から戸倉峠

神戸で船をおりて、山陽道を逆に姫路に向かう。姫路城の天主閣は広場から見上げて、一路鳥取砂丘を目ざし中国山地を「氷ノ山後山那岐山国定公園」に向かう。此の国道二九号線からは左側に幡州平野中の竜野の町のあることを、神戸から乗り込んだガイド嬢、青木さんが説明する。

竜野はそうめんの町、「赤とんぼ」の作詩者三木露風の生地である。三木露風と言われた途端、羽柴先生の好きだったことを思い出して口ずさんだ。蒲江町史編さんのため町内深島の台地に（因尾に端を発した文化七年の百姓一揆の中心人物が、流罪となった深島で、物故した人の供養塔調査の取材）に同行した日は桑の実の熟れる初夏だった。

誰ともなし赤とんぼの歌を微唱していた。

夕焼小焼の赤とんぼ
負われてみたのはいつの日か

私達は桑の実を少年の日のように次々とくった。

山の畠の桑の実を
小籠につんだはまぼろしか

今度の旅の同席者は佐伯の平川マサ先生、その平川さんも一緒に口ずさんでいた。平川さんは曽遊の地、竜野の町のたたずまいを詳しく話してくれた。露風のふるさとの詩

ふるさとの小野の木立に
笛の音のうるむ月夜
乙女子は熱き心に
そをば聞き涙流しき
十とせ経ぬ同じ心に
君泣くや母となりても

「赤とんぼ」と共に記念碑がある。露風十九才の作とか、明治から大正の若者達に、藤村の千曲川旅情のうたと共に夢多き叙情の詩心をいかにかきたてたことか。また『人生論ノート』で有名な哲学者三木清の生地でもある。詩人にしろ哲学者にしろ竜野は豊かな人間性を育てる風土性が有るのであろう。此の旅はよき詩（うた）の旅となるであろうと思った。

戸倉峠は兵庫と鳥取の県境、山峡（かい）の落葉樹は大半紅葉しており、峠のドライブインは峠の茶店の感があり、草餅はひなびた味があり食べながらガイドを聞く。平家の落人の公達（きんだち）の供養塔が大きな楓の下に車中から見えた。届かないが心で草餅を供えた。

鳥取砂丘

私は今度の旅をあらかじめ神話と詩（うた）の旅にと心にきめていたが、青木ガイドさんは、私の心を見透したかの如く説明してくれる。姫路を九時出発して三時間半で鳥取砂丘に到着したが、早々と砂丘を訪

れた与謝野晶子の歌を紹介した。

砂丘とは浮べるものにあらずして
踏めばなるかな淋しき音に

また「或る女」「カインの末裔」等の名作を残した有島武郎歌

浜坂の遠き砂丘の中にいく
淋しき我を見出しけるかも

私は有島武郎の歌はこゝに来て初めて知った。晶子も有島武郎も砂丘を訪れたのは相前後しているらしく、武郎の情死事件は此の旅の後あまり長くないという。

中国山地の風化した川砂は川の流れによって日本海に運ばれ、日本海の荒い波涛は逆に陸地に向かってたゝき帰えす。それが此の砂丘である。

大平洋に面した水戸の鹿島灘、また静岡の遠州灘の砂丘とは形態が異っている。ここの砂丘は広さはともかく、起伏が甚だしく更に特徴のある風紋ができるという。雨模様となるらしい天候にかゝわらず観光客は多い。起伏の多い砂丘の頂点は七、八〇米はあるであろう。靴底のうもり込む柔かい砂は、人の靴跡で一層歩みづらいが、高木会長、清田先生の後を追う。平川さんと同郷の塩月いしよさん二人の女性も頂上を極めるらしい。夏のかゝりに痛めた足を引きずりながら後を追った。先行した平川さんが少しおくれて私と伍して登ることとはなった。

月の砂漠をはるばると
旅のらくだが行きました
金と銀とのくらおいて
二人並んで行きました

七、八〇米の頂上コースは急斜面である。その昔は若いお姫様であり、また若い王子であった二人は「月の砂漠」を遠慮なく合唱して斜め登りにコースをとった。その登り方が楽だからである。

沙丘を越えて行きました。
黙って越えて行きました。

歌い終る頃には頂上に達する事ができたのだが、そんなに困難でもなく先着の人達は既にカメラのシャッターをおしていた。

日本海の極まりない海の果て、雨雲は海面までおおいかぶさり、荒れ狂った波は眼下の唯一つの小島を今にも噛みつくすかの如く、白い波頭が空間に躍動している。漁船の姿も沖を航行する貨物船の影もない。この波が続く限り鳥取砂丘は永遠に続くであろう。

「月の砂漠」作詩者加藤まさをは、この歌を何処で取材したのであろうか。松林とニセアカシヤで砂の移動を防ぐ林の近くの砂丘の一端に、ラクダが観光用に飼われている。そこは平らでラクダの鞍に乗る人もある。「月の砂漠」はきっとこの鳥取砂丘で取材されたに違いない。まさか遠くアラビヤまでは行くまい。海面側に美しい風紋が少しあった。その砂の表面を手の平でなでて別れをおしんだ。

砂丘は大勢でみるものではない。朝早く一人否二人で潮騒と吠えるような風の音を聞きながら、美しい風紋の中にたたずむものであろう。

白兎海岸と貝殻節の浜々

二十世紀梨は鳥取の名産、それは終わっていた。千葉県の松戸の原産だが鳥取で名をなした。

鳥取市は素通り大黒様と白兎の物語りに青木さんのガイドがまた始まった。もう既に出雲神話の勢力圏内に入った。

大きな袋を肩にかけ大黒さまが来かかると
こゝに因幡の白兎　皮をむかれてまる裸

教職の過去をもった人が多い旅だけにこの歌等はお手のもの、青木さんも一そう興が乗る。白兎がいたという沖の島は国道九号線のガード下二〇〇米程の海中にある小さな島、磯馴松が一本あり小さな鳥居がある。幾百かのワニザメを集めねば白兎は陸には渡れなかったであろう。白兎の嘘を許された大黒様は何とヒューマニズムを解された神様であろう。この白兎海岸はハマナスの自生南限地というが、路傍の土手わきに一かたまりに生えていた。

鳥取海岸一帯は古来帆立貝の漁場である。帆立て貝漁法は、私達入津湾口に古来より生産する弥二郎貝（バカ貝）と大体似通ったものらしい。機械動力をもたない古の舟で櫓を漕ぎつつ手引きは大変な重労働であった。その労働の苦しみと漁獲の喜びとが如実に表現されたのが貝殻節である。

何の因果でかいがら漕ぎなろうた
色は黒うなる身はやせる
戻る舟路にや櫓櫂が勇む
いとし妻子が待つ程に

貝殻節は最近民謡大会等でよく歌われているが、私も好きな民謡である。貝殻節の海岸は鳥取でも伯耆の国である。

悲劇の後鳥羽上皇は北条氏に、後醍醐天皇は足利氏にともに中国山脈から護送され伯耆から隠岐の島に配流されたのである。

青木さんは後醍醐天皇にひそかに忠誠を誓ったという児島高徳の「天勾践を空しゅうする勿れ」の漢詩を吟じた。在島十九年彼の島で薨去した後鳥羽上皇は

われこそは新島守よ隠岐の海の
荒き波風心して吹け

ふんまん、孤独、そして絶望の長い生涯、北条氏はせめてもの慰めに鍛刀を非常に好まれた上皇に御番鍛冶制度を設け、交替に刀工を派遣した。その中に豊後国の刀工、高田の住人紀行平（大分市高田地区）が番鍛冶の一人に選ばれたことは刀剣史では著名である。後鳥羽上皇は歌道に秀でられた方だけに藤原定家等に命じて新古今集を選せられた方であった。

山陰随一と言われる大山（だいせん）は雨雲におゝわれて姿を現わさない。薄闇が迫りかける頃米子市を通り抜ける。安来節の安来町は既に出雲路の中海添いと言うが街の明るさ以外は見えない。漸く今夜の宿玉造温泉のホテルに着く。鳥取砂丘から五時間近く走っている、大分バス米沢添乗員のテキパキとした差配で自分の部屋に落ち着く。車の騒音一つない、宍道湖畔の宿である。

宍道湖と神話の出雲平野

朝明けのホテルの窓越しに宍道湖には何をとるのか小さな漁船が多く見える。階下におりて湖畔を歩く。野面石をざっと積み重ねた三米程の護岸、この湖には大きな波浪はないのであろう。北の方向になるのだろう。島根半島の低い山脈が湖面にうつっている。この湖を泉水と見立てると山脈は大きな借景である。ホテルの造園はそれだけみると随分立派だが、自然を神々が造ったのに較べると極めて小さく工作的である、と同行の小野惣太さんと語る。小野さんは趣味でとった造園師の免許保持者、朝食の知らせで今一度眺める湖面の漁船と鴎の乱

舞は名画である。湖岸の一株の柳の枝に青葉が残り風にゆれ、根元の野菊の花が楚々として可憐、朝は身も心もすがすがしいだけに目に写る万象も清らかだ。

出雲平野は広い。稲作が依然多く施設園芸経営は少ない。日本海からの北西の季節風を防ぐため、田園の中の農家は一戸一戸大きな防風林が植え込まれているが、黒松が殆んどで、その黒松は途中で刈り込まれ庭園木そのもの、松の根方に灌木の常緑樹が松の根のすき間を完全に防いでいる。二重垣である。この作風を私は見たことがない。之は出雲神話にかかわる八重垣からだと言う。

八雲立つ出雲八重垣妻ごみに
八重垣作るその八重垣を

歌の八重垣の遺風築地垣と出雲ではいう。

肥の河（斐伊川）の上流で素戔嗚尊が八俣大蛇から櫛名田姫を守った尊は姫をめとって宮居を造った時の歌が「八重立つ……」の古歌である。青木さんの詳しい話をきゝながら斐伊川を渡るが、八俣大蛇の神話は川床が高い「天上川」といわれる河水の氾濫の多さを治めた治水の神であったのだろう。出雲大社の参拝を後にして先づ日御碕に向かう。

年の始めのためしとて
終わりなき世の目出たさを

の元旦の歌は出雲大社の大宮司の作と、これも初聞き、日御碕への海岸道路の崖下の岩島には、それぞれに国引きの神話や、国譲りの神話が残されているが、国譲りは国争いで、出雲神の代表建御名方神（たけみなかたのかみ）と天孫族の代表建御雷之男神（たけみかずちのおのかみ）の格闘で天孫族側が勝利者であった。後に建御名方神は信州諏訪湖の辺で完全降服し諏訪神社として祀られ、建御雷之男神は利根川岸の鹿島神宮に祀られている。日御碕神社参拝は社殿を道下に眺めて車内参拝、間もなく日御碕につく。神苑に続く黒松林は広く逍遥路はその中に開かれている。落松葉を踏み松かさを拾いつつ道草をとりながら同行の群からおくれる。男子十八名、女子十七名適当に伍を組んで岩鼻で記念写真。

東洋一と言われる燈台、ウミネコの経島今日も波高い日本海だが、この御碕は何となく人懐かしく感じられる。出雲路自体が土の臭があって童画的と私には感じられる先入感の精かも知れない。同じ絶壁でも足摺岬は高く厳しく、こちらは低く海辺まで降りることもできる。一つは空海が解脱を求めた道場、一つは国造りの神話、日本人の内蔵した精神界は多様ではある。

車は引き返して出雲大社へ、大国主命の総本社、初参りの私が事更に書くこともあるまい。こゝも黒松の参道、神殿にぬかずき祈念をした。何を祈ったかといわれればさてと思う。何か無心にして下さる神様だ。田中さんと一足先きにバス停に出て、手打そばの店に「出雲そば」の本場の味を賞味することにした。語尾に「ニャー」をつけるこの地方の訛のおかみさんと、こちらは豊後方言での会話はよかったが、肝心の手打そば、ずばりまづい。ただ一軒だけで出雲そばの味を片付けるのは軽卒だが、事実は一つでも事実、出雲そばの味は佐伯の駅近くの出雲そばを賞味する方がよさそうだ。

松江市に車は向う。目の病にきく一畑薬師も車内参拝、宍道湖の水際を右道下に見る。松江市に近づくと、国道添いの道路公園は黒松一色に方形の石をあしらった造形、島根県は黒松が県木だと云うが、特に松江市は一層黒松の特徴があざやかだ。宮崎の亜熱帯の緑化と好一対である。

松江城に登る、城門前のバス停に一行の最年長八十五才の深沢翁を迎えた初老の紳士、物好きとは思われたが二人の関係を聞

く。この人はかつて佐伯興人に勤めていた人だが、佐伯を去ってこの地で会社経営をしている竹内貞美さん、四十年目のめぐりあいである。旅は味わい深いもの、二人の友情に心温まるものがあった。天主閣から見おろす宍道湖は広いが、その面積はつい最後までき丶落とした。残念。

松江藩七代の藩主松平治郷は名君の誉れたかく、号を不昧、大名茶道の大家、石州流不昧派として今日までも伝えられ「上の好む所、下之に習う」、出雲地方は農作業の傍らに抹茶をたのしむというが、その不昧公に関わりの菅田庵等は日程の都合で割愛し、ヘルンこと小泉八雲の邸跡を見る。家も小さく庭も狭いが、日本が好きで一生日本を去らなかった。この家に備えられた一脚の古椅子によって、彼の愛したという庭を改めて見直す。さるすべりの古木、優に百年を越しているであろう。小さな石燈籠が一基、シャチの鬼瓦が片隅にそれぞれ苔むして、庭は簡素で茶庭の風情がたゞよう。辞去する玄関前に、ともすれば見失いそうな自然石の句碑、虚子である。

くわれもす八雲旧居の秋の蚊に

宍道湖を一周して玉造に渡る橋が三本、バスは一番大きく新しい宍道湖大橋を通るが、左手の方に宍道湖から中海えの湖口に安来節の松江大橋がある。今は中の橋である。

松江大橋流りよと焼きよと
和田見通いは船でする
出雲名物荷物にゃならぬ
聞いてお帰り安来節

松江より更に島根半島が日本海に突出した美保関、そこは関の五本松の歌がある。

関の五本松一本切りゃ四本
後は切られぬ夫婦松

この出雲を代表する二つの民謡は青木さんは歌ってくれなかったが、青木さんのこの地方の郷土史と神話は逸品だった。誌上で礼を申し上げたい。山陰の山野にさらばして一路安芸の国へ。ただ宍道湖の名物の名だけでも土産物としてお持ち帰りを。

白魚、エビ、鯉、スズキ、ウナギ、ワカサギ、シジミ、名前だけなら荷物にはならないだろう。

三次での風土記の丘の見学は計画していたが時間の都合で中止、宇佐の風土記の丘をいつか見る事にするか。

三次につく前に、竜野生まれの哲学者三木清や西田幾太郎博士にその影響を受けた作家、倉田百三の『出家とその弟子』を、平川さんと語り終った途端、こゝ三次は作家倉田百三の生地ですと青木さんが説明した。私は青年期、熱読した倉田文学、ここが生地とは偶然にしてはあまりに以外『出家とその弟子』の主人公唯円が、師親鸞に求めた、愛欲と解脱のはざまの中で人間的苦悩の訴え。その師の親鸞の浄土真宗の熱烈な信仰地として安芸は門徒宗の多い所である。三次もそうではなかろうか。

今日も暮れて夕やみの中、宮浜温泉の石亭ホテル。ホテルの一夜は塩月佐一佐伯史談編集長の司会で旅のねぎらいの夕、石亭の○○姉さんの黒田節に斗盃を傾けて清田先生の踊り、最後は羽柴先生を偲んで「赤とんぼ」のコーラスでおひらきとなる。

高橋徹先生と同室の私は、更に旅情を惜んで語りついだが、高橋元予備士官はロシア抑留生活三年の中での捕虜、ゲルマン人の性格やまたスラブ人の性情等々……。

最後にこの旅の歌のしめくゝりとしてボルガの船唄を望んだ。瓢々として唄う味な声、歌う人も聞く私も、古稀に近くまた古稀を迎えた過ぎ去りし人生を追懐しての自己の鎮魂歌かも知れない。